

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

つながる、群れる、生き延びる ～ひとりで生きない性教育のあり方～

教育や支援の現場にいと、のっぴきならない状況に陥った子どもに出会うことが少なくない。学校や家庭に居場所がない子、安全に過ごせる一夜が叶わない子、絶望感から死を願う子……。とりわけ、性教育に携わる人にとって、子どもの中絶や出産といった一刻を争う事態に直面したり、貧困や被害の連鎖から抜けられずに、より大きな困難やトラブルに巻き込まれていく子どもを目の当たりにしたりするのは、よくあることかもしれない。

そんなとき、自分の無力さを感じながらも、ため息とともにこんな言葉が口をつく——「誰かに助けを求めればよかったのに」「もっと人を頼ればよかったのに」。どうして、こんな事態になるまで我慢していたの。もっと早くSOSを出してくれれば、何とかなかったかもしれないのに、と。

こんなふうに誰にも助けを求めず、他者に頼れない人々の姿を、著者の天童氏は「寂しいわきまえ」と表現する。いまや他者とのつながりは、ビジネス化された関わりに取って代わりつつある。困りごとやトラブルの解決は、専門家かボランティアの手に委ねられ、余裕のない人が関わるのはかえって迷惑かもしれない。そう考える「まじめな人」ほど、自分が手を差しのべないのに、他者にそれを求めることはできないという「寂しいわきまえ」を持っているのではないかと著者は指摘する。

本書は、そんな現代の孤立した関係性を懸念する著者が、「つなぐ」という営みを職業にした16人と交わした対談集である。被災地、農園、工場、産院、障害者通所施設……さまざまなフィールドで新たなビジネスを創り出した人たちは、年齢も性別もキャラクターも多種多様。学生時代からの活動を展開させた若者から、まったく異なる仕事に転じた人、長年にわたり活動を続けてきたベテランまで、いずれもユニークなビジネス



だから人間は滅びない

天童荒太著
幻冬舎新書
定価 840 円＋税

について語る。どの語りからも、サービスを介してつながる人々の姿がみえるのが興味深い。例えば、廃材を利用したデザイン雑貨のブランドとその生産拠点である障害者通所施設との関係は、お互いのリスペクトと自身の仕事に対するプライドによって、心地よい緊張感が伴う。あるいは、産後の母親をケアする「ドゥーラ」という仕事を普及させている女性たちの声には、彼女たち自身の出産や人生の選択に対する思いが重なる。つまり、「つなぐ」仕事とは、単に顧客や対象者との関係を意味するのではなく、さまざまな人生を認め、重ね、語り合っていく関係を築くことなのだ。

「つなぐ」ことによる出会いや関係性には、苦しみも伴い、しがらみもある。しかし、だからこそ、それを乗り越えて成長する機会にもなる。本書に登場する人々の力強さは、勝者となったからではない。わからないことの価値を知っているからこそ、とことん悩んで、しっかりつながるのだ。

天童荒太氏は、虐待を受けた子どもたちとその家族を描いた『永遠の仔』(1999年、幻冬舎)、死を悼んで旅する青年の『悼む人』(2009年、文藝春秋)に続き、2013年に出版した『歓喜の仔』(幻冬舎)では、家族の貧困や逆境という過酷な現実を生き延びるきょうだいの姿を綴った。『永遠の仔』においては家庭内で隠匿されていた性的虐待や暴力が、この数年で、家庭内のみならず社会全体にあまねく起こりうる問題として認識されるようになった。家族そのものが子どもを育てる力を持てず、地域も家族を支えきれない現代。戦場さながらの日常のなかで、『歓喜の仔』の子どもたちはサバンナで生きる動物のように「群れ」をつくって生きることを選ぶ。それが、動物としての『仔』が生存する術だから。

「寂しいわきまえ」は、幼い頃から孤立に慣れた心に刷り込まれていると著者はいう。ひとりで生きない力は、人とつながる力である。現代の性教育で育むべき力でもある。(大阪大学大学院准教授 野坂祐子)